

東京 IPO 特別コラム

2018年5月9日 Vol.122

宴の後の2018年のIPO市場

GWも明けて端境期となるIPO市場には宴の後の寂しさが漂っています。行き過ぎた人気は反省につながり過小評価された銘柄への回帰もこのタイミングでは起こりがちです。一極集中でリスクマネーが押しかけると結果はいびつな株価形成となり、その後の極端な人気離散につながるのが株式相場の常ですが、2018年4月までのIPO市場はまさにそうした展開後の反省気分覆われているように感じられます。

株式市場は上昇と調整の循環で変動を繰り返しています。トランプ大統領就任以来、順風満帆だった国内外の株式市場にはリスクマネーが入り込み、右肩上がりの上昇を見せてきましたが、そうした相場展開は1月の後半から変化を見せ、その後の株式相場はNYダウ、日経平均が1月高値からおよそ3か月目にボトムを打ち、12から15%の値幅調整を終えて現在は日柄調整の最中にあることをご理解頂けるかと思います。ピークから4か月を経ようとしている現在が安心して投資できるチャンスのもありますが、実際にはボトム形成時の先行き不透明感の強い時期が最も投資のチャンスだったという結論になります。結果としてボトムは形成したが、なかなかそうしたタイミングでは投資しにくいことも事実。そうした相場心理がIPOへの一極集中につながったという見方もできます。読者の皆様はどのようにお考えでしょうか。

今年は2月23日のMマートから始まったIPO市場ですが、銘柄ごとに様々な変動が見られました。概ね言えることは初値人気を集めても、その後は反落場面を迎える。短期資金が集まりやすいIPO市場は資金の逃げ足も速い。上場初日に高値をつけるケース、上場時や直後は不人気でも後から人気が高まるケース、初値が公開価格を下回りその後もなかなか評価が高まらないケースなど様々の株価変動が見られます。

IPO銘柄の公募を得ようと申し込んでもなかなか当たらずに落胆をしている投資家にとっては初値で投資するのか、しばらく様子見してから投資するなどの手法がIPO銘柄への投資では選択されることになります。もちろん、何らかの基準で投資しないという結論もあり得ます。とことん人気の成長銘柄に投資タイミングを求めていくやり方も良い選択肢なのかも知れません。時間分散と銘柄分散をうまく組み合わせながら堅い運用をされることが筆者は重要だと考えています。

5月は31日のラクスル(4384)までIPOがありません。アスクルにも似たようなユニークな社名が印象に残る銘柄ですが、印刷シェアリングエコノミーということ人で人気を集めると、実際には初日が寄らずに2日目か3日目の初値形成ということになりますので6月1日か4日の初値形成になるかと見られます。この間、IPO銘柄は出てきませんので、この間は既存の直近IPO銘柄への見直しがなされることになります。

ここでは今週の決算発表が注目されます。割高感の多いIPO銘柄の中から新たな成長の芽を持った銘柄が見出せば格好の投資チャンスとなりえるからです。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)